シーボルト『NIPPON』の色つき図版

宮崎克則

The Study of Comparing Color Prints in Siebold ‘NIPPON’
Katsunori MIYAZAKI

はじめに
シーボルトは日本追放となってオランダへ帰り着き、2年後の1832年に36歳で『NIPPON』を刊行し始める。1851年までの約20年間に20分冊に13図版を自費出版した。13図版のうちには合併版・合併配色などがあり、決して一様ではないが、1分冊につき図版17〜20枚、そのうち2〜3枚の色つき図版を配った。1）

『NIPPON』に掲載された図版数は367枚。当時の日本の風景・風習・人物・産業・地図情報などがふんだんに盛り込まれている。これらの図版は、川原慶賀氏の絵をもとに、他の資料に基づきオランダの画家たちによって石版画に描かれた。図版の右下、あるいは左下に極めて細かな文字で後の名前が記されている。これらの図版のうち、47枚に色づく。色ムラがあることから、色刷りでなく手彩色だということらしい。

国内を中心に『NIPPON』を調査していくなかで、色つき図版にバリエーションがあることがわかった。「NIPPON」の作成・出版については、ライデンのラ・ラウが印刷したことは新長野に記されているものの、色刷りはどのように行ったのか、その費用はどれほどだったかなど、具体的な記録は多くない。そこで、現存する『NIPPON』を比較することによって、また、ほぼ同時期に自費出版した『日本植物誌』・『日本動物誌』とも比較することによって、シーボルトの著作出版に対する方向を明らかにしていく。

ここで使用する図版は、九州大学附属図書館医学分館所蔵の初版・未解体の『NIPPON』（大正15年、医学部医学教室購入、代金3000円）と、シーボルトの死後に在庫を買い取ったカリリッツによって販売された『NIPPON』（福岡県立図書館所蔵、大正7年購入、『日本植物誌』・『日本動物誌』等を含めて代金1000円）を中心に、価格版の色なし版を所蔵するシーボルト記念館本や他機関の『NIPPON』を参照していく。

(1) 原稿『Si) 보들『NIKKO』의 편역』(「九州大学総合研究博物館研究報告」第3号、2005年)。
1. クォリッチ版『NIPPON』

シーボルトは1866年10月にミュンヘンで死去し、『NIPPON』などの在庫は夫人によって1868年に処分された。これがロンドンで古書店を営むクォリッチに渡り販売された。在庫であるから、本文図版ともに初版本と同じ紙であり、ファーン・ヘルガーソ社の透かしである「VANGElder」あるいは「VG」のWatermarkがあるが、初版本と異なる特徴も備えており、ここではクォリッチ版と呼ぶことにする。

九大本 透かし

シーボルトの最晩年については、フランスの作家ドーデの「月曜物語」（1）に記されている。これは40余の短編集であり、最後の「盲目的の皇帝」がシーボルトとの交流を記している。両者が交流したことになったのは、1865年、シーボルトが日仏貿易会社と商工学校を日本に建設することをフランス皇帝ナポレオン3世へ建議したことである。シーボルトのフランス語を訂正したのがドーデであった。シーボルトはその返礼として「盲目的の皇帝」と題する「十六世紀の日本の悲劇」を送ることを約束した。もと「盲目的の皇帝」とは、第1次来日時における江戸参府の帰路、大阪の座談でシーボルトが観た歌舞伎「妹背山女廻調」のことである。例示された「シーボルト観劇図」は、その時のお摺子を парт・象頭山参詣から帰る鶴鶴が描いたものである。中央は携帯した商館長スチュールルに、右側がピュルゲル、左側がシーボルトである。シーボルトは、その「月日」（2）に長々とストーリーを記し、絵畵付も持ち帰っていた。彼はこれを歌にしようと考え、ドイツの友人で歌劇作家マイエルベルルのために翻訳した。しかしマイエルベルルが作曲中に死去したため、そのままとなっていた。

シーボルトによるフランスへの献身は成功するかに見えたが、普仏戦争が起こり、フランスは総力を欧州体制に集中しなければならず、シーボルトの計画は頓挫となった。彼は1866年にドイツのピュルゲルに帰り、すぐにミュンヘンへ移った。バイエルン政府がシーボルト再来日時の収集品を購入して民族学博物館を開設することになったからであり、シーボルトは収集品整理のために北の王宮庭園にある博物館へ通っていた。そこでドーデがやってくる。

シーボルトからの日本の話を聞き、興味をもったドーデは、主に日仏間の関係を検討し、日本に来ることを模索した。しかし「盲目的の皇帝」はミュンヘンにはなく、ピュルゲルのシーボルト夫人の手許にあった。シーボルト夫人からの郵送を待つこと10日ぶりに、ある日ドーデは顔を輝かせて「例の手に入りましたぞ」「明日の朝博物館へ来たまえ、一緒に読む。それがあなた素晴らしい」といい、とても元気だった。翌朝、ドーデが博物館に行くと、前夜（1866年10月18日）にシーボルトは敗血症のために70年9か月の生涯を閉じていた。結局、「盲目的の皇帝」を見ることのできなかったドーデは、「私は最後まで、日本の素晴らしい悲劇の題だけしか知らなかった」という。

シーボルトの遺稿はミュンヘンのタール教会通りの南旧墓地に埋葬され、墓が建立された。その後、彼の未亡人は1868年5月に息子2人、娘2人とともにピュルゲルからヴィースバーデンに移った。その際、彼女は夫の文庫の処理を相続相に委ねた。ハンス・クーラー「シーボルト父子伝」（3）によると、その重さは85ツェントナー（1ツェントナーは60kg）あった。この男は「日本植物誌」と「NIPPON」の数部を古本屋に、または20ツェントナーを反故紙として商人に売り、本の一部を着服した。彼は逮捕され、ミュンヘンの地方裁判所より5ヶ月の懲役に処せられた、という。

これにあって的占本屋クォリッチであったかどうか不明ながら、クォリッチ社の在庫記録には、「日本植物誌」、「日本動物誌」などを1868年5月に購入したことが記されている。「NIPPON」についての記録は見あたらないものの、クォ
リッチがシーポルト著作の残部を一括して購入したと考えられている。

現存する欧米の館の書店、ヨーロッパの本のホームページ（http://www.quaritch.com）によると、創業者のバーナード・クワリッチ（Bernard Quaritch, 1819–1899年）は、ドイツ・ゲッチンゲン近くのヴォルスベル生まれ。15歳で書店に勤め、ベルリンで修行を重ねた後1842年にロンドンへ移る。古書業界の第一人者であったヘンリー・ポーンのもとで経験を積み、1847年に独立したクワリッチは、「リッチェルク歌聖書」などの稀覧書をはじめとする上質の写本類・祈詣書・図録などに携わり、得意先にはナポレオンの弟イルシン・ポナルルなどがおり、独立後わずか10年余のうちに急速に発展した。彼は新刊書の一部を買い集めて販売することも行い、ドイツ語で書かれた「NIPPON」もその一つとして販売されたドイツ生まれのクワリッチには、「NIPPON」の価値が見えていたのである。
ただし、シーボルトの「NIPPON」は完結しておらず、未完成であり、しかも分冊で通じるページ番号や全体の目次もなく、図版・本文ともに1枚1枚バラバラの状態だった。その状態で「NIPPON」を買い取ったクオリチッチはそれを整理し、各章節の構成・配列を示した校合メモ（Collation）を英語で作成した。3ページの「Collation」は「NIPPON」と別売であったから、これを含まないクオリチッチ版「NIPPON」も現存している。「Collation」末尾の注記には、ミュンヘンからロンドンに移送されたこと、タイトル頁を印刷し、「Collation」とともに販売していることを記し、「1869」の年号が付されている。ここでは、赤坂（東京）にあるドイツ東洋文化研究協会（OAG）が1873年に購入したクオリチッチ版「NIPPON」を掲載している。社団法人・ドイツ東洋文化研究協会は、日本を研究し、ドイツ語圏の国々に日本を紹介することを目的として、1873年（明治6）に在日ドイツ人の集まりを母体として東京で設立された組織であり、設立と同時に「NIPPON」を購入している（クオリチッチは、横浜・ドニーニューヨークスで販売に付するためにロンドンから本を輸出していた）。

クオリチッチ社の在庫記録を調査された佐藤図氏（5）は、クオリチッチ「Collation」は1851年の20分冊までに発行された「琉球諸島」の部分も含めており、「NIPPON」を最初に整理した文献として高く評価している。クオリチッチ社には「NIPPON」以外のシーボルト著作の記録はそうものの、「NIPPON」に関する在庫記録はなく、どのように販売されたのか、どれほどの「完全本」を持ち、どれほどの「不完全本」を抱えていたのかなど、詳細は不明であるという。

これまでの調査範囲であるが、クオリチッチ版「NIPPON」を所蔵する機関名をあげておく。その前に、「NIPPON」に使用された紙製について述べておく。図版には大判と小判があり、大判は2割折、小判は4割折である。ファン・ヘルダー社から購入された紙の大きさは縦59.5cm×横79.0cmであり、大きな地図などはそのまま印刷されたが、通常の図版はそれを縦に半切して印刷された。これが2割折（縦39.5cm×横39.5cm）の図版である。肉眼で見ると1辺に切断した跡を確認できる。さらにその紙を横に半切して4割折（縦39.5cm×横29.25cm）ができる。数点の図版を除き、同じ石版で2割折・4割折ともに印刷されており、余白が違うのみである。価値も違った。2割折は色つきの豪華版（308ターペー）であり、4割折は色なしの廉価版（187ターペー）であった（当時の平均的な労働者の年収は120〜160ターペー）。

本文編は、図版よりも薄いファン・ヘルダー社の紙を使用し、2割折の紙に両面印刷した。これを半分に折りたたむから、大きさは4割折と同じになる。したがって、廉価版では関連する本文と図版を交互に組み合わせ、数冊に分けて製本されている場合が多いのに対し、豪華版は図版と本文で判型が違うので、図版2冊・本文3冊というように別に製本されている場合が多い。

クオリチッチ版「NIPPON」所蔵機関

OAG（ドイツ東洋文化研究協会）
2割折（大判）彩色 図版2冊・本文3冊
クオリチッチ「Collation」あり
永青文庫
2割折（大判）彩色 図版2冊・本文3冊
クオリチッチ「Collation」なし
東洋文庫
4割折（小判）彩色 図版・本文合冊6冊
クオリチッチ「Collation」あり
4割折（小判）の「NIPPON」に彩色はないが、ここでは彩色されている。しかしこれは当初からの彩色ではなく、製本後に彩色されたものであり、旧蔵者のアーネスト・トゥバリによって色が塗られたと考えられる。上手な彩色であるが、多くは下手である。

神戸市立博物館
a)4割折（小判）色なし 図版1冊（本文なし）
クオリチッチ「Collation」あり
b)2割折（大判）彩色 図版2冊（本文なし）
クオリチッチ「Collation」なし

天理大学附属天理図書館
a)2割折（大判）彩色（291-08-110 与路津代文庫） 図版2冊（本文なし） クオリチッチ「Collation」なし
b)2割折（大判）彩色（291-08-336） 図版2冊（本文なし）
クオリチッチ「Collation」なし
c)2割折（大判）彩色（291-08-338） 図版2冊（本文なし）
クオリチッチ「Collation」なし

東京大学総合図書館
2割折（大判）彩色（エリオット文庫 A.100.321） 図版2冊・本文なし
編で点線の箇所のタイトル部分が変わるが、ともに1852年にライデンで出版されたようになっている。繰り返すが、誤りである。

最後に初版本を所蔵する機関名をあげおこう（現在までの調査範囲）。

【初版『NIPPON』所蔵機関】
九州大学附属図書館医学分館
2冊（大判）彩色 未装丁  原版14冊・本文12冊
近畿大学図書館
2冊（大判）彩色 未装丁  原版5冊・本文6冊（欠少）
武田科学振興財団 杏雨書屋
2冊（大判）彩色 未装丁  原版3冊（54枚の謄本）本文3
冊（欠少）
慶應義塾大学三田メディアセンター
2冊（大判）彩色  原版2冊・本文2冊
国立国会図書館
4冊（小判）色入り  原版・本文合冊3冊（アイヌの絵はなし）
天理大学附属天理図書館
4冊（小判）色入り 291-08-110与路浦代文庫 原版・本文合冊4冊（トラウツの手紙あり）
長崎県立図書館（現・長崎歴史文化博物館）
2冊（大判）彩色  原版6冊・本文2冊（「千字文」、「明合」ののみ）
シーボルト記念館
4冊（小判）色入り  原版・本文合冊4冊
大英図書館
2冊（大判）彩色  原版7冊・本文3冊
ケンブリッジ大学図書館
4冊（小判）色入り  原版・本文合冊7冊
ブランドンシュタイン城
a)4冊（小判）色入り  原版2冊・本文2冊
b)2冊（大判）彩色  未装丁  原版9冊

（注）
(1)デーヴィス・クーパー「月暦 confiscated」、墨波書店、1936年。
(2)「喜多見隆司」シーボルト 信浓旅行中 impressions」、思文閣、1983年。
(3)「ハルム・ケルナー」『ハルム・ケルナーのシーボルトと日本』、創造社、1974年。
(4)「K. インフレーション」シーボルト『日本』解説、『洋洋学術叢書』、紀伊国屋書店、1994年。
(5)「ヨーゼフ・クライナー」『三つのシーボルト』、朝日新聞出版、1996年。
(6)『震災後シーボルト日本』の最期刊行号とその全体構想について、『シーボルト日本』6号、紀伊国屋、1979年。
『NIPPON』の内表紙

初版 内表紙 1832年 九大本

クオリッチ版 内表紙 1852年 福岡県立図書館本

トラウツ復刻版 内表紙 1930年

講談社復刻版 内表紙 1975年
2.色つき図版の比較
[1]第1回配本（1832年）の色つき図版

九大本に残る配本時の目録「INHALT」によると、第1回配本では、本文として「NIPPON I」と「NIPPON III」の一部が配られた。「NIPPON」は1〜Ⅵの7巻構成であり、1巻は日本の地理情報やヨーロッパ人による日本発見史、および平野出鳥の販売について記述し、3巻は日本の歴史を神話を語っている。図版は本文に対応して、口絵を含めて17枚が添えられ、そのうち考古遺物を描いた2枚に彩りがある。

彩色された図版は（222）（以下通し番号は、雄鶏堂の日本語訳「シーボルト『日本』図解」と2巻に対応している）「勾玉・金環」（223）「管玉ほか」であり、その解説は、シーボルト門人の伊藤圭介（名古屋市立博物館学術）が提出したオランダ語論文「「勾玉、即ちまがった玉の記述」」をもとに、シーボルトの詠美を加えて記述されている。シーボルトは、勾玉の種類・使用・分布等を系統論を述べており、より古い文化をもつ民族が日本へやってきて最終的に新しく朝を創建したため、かつての民族はその宝石をもって北へ向かった。今日（江戸時代）でも廃絶・千島では勾玉が「シトギ」という貴重な装飾品として用いられ、琉球では勾玉のような石を身について宗教行事を装飾品としている。という（2）。彼の文化人類学的視点からの説は、現代の考古学からみると批判すべき部分もあるもの、忘れることのできない日本考古学上の業績と評価されている（3）。

彩色のない勾玉・金環・管玉類は、多くは伊藤論文からの転写である。もっとも伊藤の図は簡単で彩色もなかった（伊藤は本巻石摺「曲玉問答」（4）を基にしている）。むしろ「NIPPON」の方が立体感があり、図として洗練された表現となっている。

彩色された勾玉類は、シーボルトが収集したコレクションまたは友人のコレクションの模写であり、シーボルトは本文の注記で、「私は勾玉を手に入れようという努力をしてみたが、Ⅲ第1図（b）の2.56.7.11にみられるようなものを得たにすぎなかった」という。したがって、彩色された勾玉類は、実物や実物の模写（彩色あり）がシーボルトの手許にあったことになり、それをもう少し色が塗られた。九大本と福岡県立図書館本とを比べてみても、他所の「NIPPON」と比べてみてもそれほど大きな差異はなく、絵画の勾玉や金環の一部が描かれ内部の構成が露出した金環の様子がよく描かれている（5）。彩色された以前の石版画は、シーボルト記念館本が示しているように、金環の部分がかなり薄かった。

（注）
(1) 田方幸雄　「門人がシーボルトに提供したに関する論文の研究」《日本文化研究会論集》1996年度、1998年、伊藤文論の復元（日本語訳はシーボルト文献研究会編「施藤多士先生文集」（著者序言、1996年））原作はポール大学（ドイツ）図書館に現存する。
(2) シーボルト『日本』IV頁、10頁（1832年）。
(3) 同上、出鳥「勾玉に関する記述」、シーボルト『日本』の研究と解釈、講談社、1977年。
(4) 同上、「曲玉問答」（1832年）。
(5) 高倉洋子氏（西南学院大学）のご教示による。

（註）
「NIPPON」原版などのシーボルトの私的な文書を所蔵するブラントンシュタイン城（ドイツ・ヘッセン州）シュルトビルク市立博物館に、勾玉などの下絵がいくつか残っている。これは印刷過程の校正を示すものでなく、版下であり、シーボルトがどのように版を上書きしたかを知ることができる。
[222] NIPPON Ⅲ 第1図 (b) 勾玉・金環
[223] NIPPON III 第2図(a) 箏玉ほか

九大本
福岡県立図書館本
シーボルト記念館本
初版 武田科学振興財団本
付記 [1] 日本の近隣諸国と保護国—日本原図による

第1回配本におけるメインの図版は、「日本辺界略図」であり、これは日本を含めた東アジア地域を概観できる地図であり、当時のヨーロッパでいまだ不明だった中国について、それが島であるとして「St. Mammia」(Seto)1808年と記し、開発地図の成績であること強調している。この図版は、幕府天文の高橋景保が文化6年(1809)に親撰で作成したものであり、シーボルトはこれを高橋に賃費を支払っていた。ただし、高橋は「日本辺界略図」と世界図の「新編世界全図」をセットにし、序文を、跋文を附言の重要性が証された表記としていた(1)。シーボルトが入手したのは「日本辺界略図」のみであり、今もライデン大学図書館のシーボルト・コレクションに残っている。それには、シーボルトを読むことができたカタカナが地名の横に朱書されている。タイトルには朱書きがなく、シーボルトは読み間違った「NIPPON」のなかの「日本辺界略図」を「ニッポン エ シン リョウ クイソ」と読まれている。原図にある箇所で書かれたタイトルの読み方である。

NIPPON] 図版の「日本辺界略図」には、異なる石版の画がある(2)。九大版と福岡県立図書館等を比べると、右下にあるタイトルの文字が異なっており、明らかに版が違っている。その他、クーリッヒ版がすべて福岡県立図書館等と同じでなく、また他所の初版がすべて九百版と同じ版ではない。しかし色の有無が両方の版に差し付いている。彩色の仕方に多少の違いはあるものの、中国・朝鮮・ロシア・日本の境界を色分けする方法は共通しており、購入者による彩色でなく、当初から色が塗られていたと考えられる。原図である高橋の「日本辺界略図」も境界を色分けしている。現段階では結論づけることはできないが、初版・クーリッヒ版の栃木数に彩色された「日本辺界略図」が含まれている。

(注)
1) 上原久「高橋景保の研究」(近著社,1977年). 北海道ブリゲン中央資料館に名号に於いての「日本辺界略図」、「新編世界全図」があり、その絵は九州大学デジタルアーカイブ(http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/kyoysu/)で見ることができる。
2) 東野一雄「シーボルトと「日本辺界略図」」(「日本学術の研究」V.新社,1979年)
[1] NIPPON I 第1図 (a) 日本とその隣国および保護国—日本の原地図による
第2回配本（1833年）の色つき図版

第2回配本は1833年の秋頃に出たという（1）。本文編は、「ニッポン」の産業に関する章で、茶の栽培・製法と茶園の土壤などについての記述。そして「ニッポン
園芸」の近隣諸国に関する章の朝鮮（「高麗」）について
の記述が出た。図版は本文に対応する17枚が配られ、そのうちの（326）「茶の木と実」、（337）「朝鮮漁夫の
一家」の2枚に手彩色がある。

シーボルトは茶を植物学の研究対象として多くの標本
を集めており、それは今もライデン国立植物標本館
に保管されており、そのなかに「茶の木と実」の画に使用
された原標本も残っている（2）。その標本から作っ
たのか、図版の原画は他の多くの植物画とともに、ロシア
のサンクトペテルブルク（旧ニコライ）にあるコロマ植物
物研究所にある（3）。作者は不明であり、この原画をもと
に一部だけが彩色されていることがわかる。

茶に関するシーボルトの記述は、自ら体験・観察した成
果ともに、1830年以降の長年にわたり書かれたオラン
ダ語論文「日本における茶の栽培と茶の製法」（4）をもと
にしている。彼の目標は、ケンペルやツァンベルクの成果を
超えることにあり、「ニッポン」出版以前に個別論文を発
表していた茶の種や苗木をジャワに送ることに成功し
て製茶業の基礎を築いていた。

一方、朝鮮に関する記述は漂流民からの聞き取りにも
とづく。出島の向かい側に対馬藩の屋敷があり、日本に
漂着した朝鮮人は漂着地から長崎へ送られた。彼らは
長崎で船の修理をとび、対馬藩を経由して朝鮮へ
送り返された。シーボルトは対馬屋敷を訪れ、漂着した
朝鮮人に面会して直接に朝鮮語や風俗習慣について聞
き出した。図版をしながら休憩する漂流民たちを描いた
のが、川原慶賀、画の下に「Toioske Jap. pinx.」
とある。「Toioske」は登名助であり、日本人の川原慶賀
（登名助）が描いたという意である（オランダ語の「pinx」は、「He
painted it」ということ。現在、オランダにあるライデン国立
民族学博物館に慶賀が描いた3枚の朝鮮人物画がある。
掲示しているように、3枚のうち2枚に慶賀の落款がある。
シーボルトは慶賀の原画を1枚にまとめることにした。彼の
指示にしたがって石版画を描いたのは、ライデンで活動し
ていた石版画家のエルクスレーベンであり、その名は画
の右下に「Erxleben in lap.delin」と細かく書き込まれて
いる。シーボルトは画の解説のなかで、直接に朝鮮で収集
した情報でないと断りつつ、彼らの衣装は朝鮮沿岸住民
に見られる民族衣装だといい、その目鼻立ちからモンゴ
ル人種に属する北東アジアの特徴がよく出ているとい
う。

色彩についてみると、九大本の「茶」には明らかのように、
鮮やかな部分の週間に「にじし」が見られる。当初、九大
本は茶葉の色もやや変色しており、単に絵の具がにじん
だのかと思っていたが、他所の「ニッポン」にも同様の「にじし」
が確認される。クオリッチ版の福岡県立図書館に面
もない「にじし」が認められる。「にじし」の正体は不明
であるが、絵の具の発色や「にじし」のためだけに何か
を塗ったものと考えられる。「茶」ほどに明確でないが、第
1回配本の図版にも彩色された部分の週間に同じような
にじしを確認することができる。「にじし」のある彩色
図版は第2回の配本までであり、その後の図版には
ない。この「にじし」は、石版で刷った後に手で彩色するときの
試行錯誤の結果でであると考えられる（「にじし」がはとんど確
認できない初版の武田科学振興財団、クオリッチ版の神戸市立
博物館本もある。）とくに、「にじし」が初版にも、クオリッチ
版にも存在することから、クオリッチが「ニッポン」在庫を
買った時にはすでに彩色されていたことがある。つまり、
クオリッチ版「ニッポン」の色つき図版は、後の彩色でな
く、初版と同じく彩色され、在庫としてシーボルトの手許に
保管されていたのである。

同様の試行錯誤は漂流民の画にも見られる。画
の色全体に原画にない背景色がある。これは手彩色でな
く、塗りわたっている。石版画ができあがった後に薄い黄土色
の背景が塗られ、その後に手彩色が行われている。これも
一つの実験だったのだろうか。この形式の彩色図版はこ
れ以後なく、1枚のみである。背景色を塗る場合に紙が
ズレようでも、それぞれに背景の位置が微妙に異なったり、
傾いたりしている。ここでは他所の例としてはいくつかあげて
いる。講談社の復刻版は近畿大学を底本にした画が多
く、それもそうだろう。背景の傾き具合が同じである。
シーポルト「NIPPON」の色付き図版

（注）
（1）マティ・フォーラー他「シーポルトと日本」、Horstel出版、Leiden、2000年。
（2）石山聡一「日本における茶樹の栽培と茶の製造」（シーポルト「日本」の研究と
開発）、講談社、1977年。
（3）「シーポルト旧帳 日本植物図譜」（1993年、東京都文化庁）。
（4）高野長英編「日本植物学研究室編「施藤多先生
文献集影」（永井書店、1936年）。原本はボフム大学図書館蔵。

ロシア、コマロフ植物研究所蔵

高野長英「日本における茶の栽培と茶の製造」

ボフム大学図書館蔵
[326] NIPPON VI 第1図（a） 茶の木と実
[337] NIPPON Ⅶ 第1図 (a) 朝鮮 漁夫の一家
[原画] 朝鮮 渔夫の一家 (ライデン国立民族学博物館蔵)

川原慶賀 筆

川原慶賀 筆
第3・4回配本（1835年）の色つき図版

第3・4回配本は、1835年の1月と2月にそれぞれ出たという（1）。第3回配本は「NIPPON II」の日本人の人類学的特徴、「NIPPON V」の宗教についての記述。図版は本文に対応して人物像や虫の形、仮像を描いた17枚が配られたが、彩色図はなくすべて赤絵であった。第4回配本では、本文として「NIPPON I」の日本への旅行記などが挙げられ、図版にはシーボルトが見た長崎港の水深図や景観図、長崎港の「改正日本奥地径路図」が出された。図版数は他の配本に比して少なく、11枚であるが、手彩色による4枚の地図（31, 32, 33, 34）「日本奥地徑路全図」が添えられた。

4枚の地図のタイトルは、漢字で「日本奥地徑路全図」と印刷されている。原図のタイトルは、表紙に「改正日本奥地徑路全図」（内封「新版日本奥地徑路全図」）とあり、水戸藩の「大日本史」編纂にも関係していた儒者、地理学者である長保赤水の作である。図版は、長保自身の踏査とや当時の官撰図版、地理・天文等の比較考察によるもので、後の伊能図のように実測にもとづいていないが、均整のとれた沿岸線の輪郭など図形の正確に高い点で、江戸時代後半に何度か版を重ね日本国の主流をなした。シーボルトは「NIPPON」のなかで、この図は書店で売っており、教養のある日本人は持っている図版だと述べている（2）。

初版は安永8年（1779）、2版は寛政3年（1791）であり、シーボルトは文化8年（1811）の3版を利用している。ライデン大学図書館には、10点の同系統の「日本図」があり、そのなかにはシーボルト以外の人物による収集も含まれている。そのうちの1点（番号UB2200）の表紙に「56改正日本奥地徑路全図常州水戸長玄珠子君父1811」という付箋が貼られている。この付箋は、収集した図書類をシーボルトが助手のオフマント・郭成章とともに整理して、1845年に刊行した目録を切り貼りしたものであり、筆跡は完全に一致する。目録は125部発行され、巻頭にはラテン語によるシーボルトの著名と次名があり、第1部の「百科事典類」から第11部の「水版図」まで内容により詳しく分類され、一連の番号が付されている。ラテン語に翻訳された書名・著者・刊記などはホフマンが担当し、漢字による目録は郭成章が手で書きために写した。表紙にある付箋は、郭成章が作成した目録を切り取り、貼り付けている（3）。

文化8年版をもとに、「NIPPON」の石版画を描いたのは郭成章であり、シーボルトは本文のなかで「中国の書写生の郭成章に忠実な新着の石版画を作らせた」という（4）。これほど「忠実」に書かれているとはいえ、新たな翻訳をしないが、シーボルトは地名を日本語のままに写させた。これは第1回配本の「日本奥地徑路図」の場合と異なり、意図的に行っている。シーボルトは、赤水の地図に縦線・緯線はあるが、正確ではないと見抜いており、地名を抜き出し刊行したものである。それについての話題は、「漢字と日本文字で書かれている地名を見つけ出し再現するのに誰にも乗る試みである。このように地名が一般的に役立つことを否定するものではないだろう。現在は漢字と日本文字を取扱いを見つけ出し再現する機会もあるので、地名を抜き出し刊行すると、地名の役立つのは明らかである」と述べる（5）。確かに、現在では翻訳された地図よりもその地名の言葉で書かれた地図の方が便利である。シーボルトは、日本の渔民や船乗りは誰でもこの地図を読むことができ、水先案内が可能であるといえる。

原図の「改正日本奥地徑路全図」は縦85cm×横1370cmの大きさであり、シーボルトがこれを4分割して描かせたのも地名を読むことができるようにするためであろう。「NIPPON」のなかの「日本奥地徑路全図」は、ファンヘルゲ社から購入された紙（縦9.5cm×横79cm）を切断せずに印刷されている。通常の豪華版図版に比べると、倍の大きさになるので、見開き図は折り込み図として製本されている。

彩色についてみると、原図は国ごとに色分けされてい
る。「NIPPON」でも国ごとに色分けており、多少の違いはあるが、原図に沿っている。九州・山口を比べると、原図に赤色で示された肥前・豊後・大隅・周防の国は、それほど濃くない赤色系統、ピンク色が塗られている。地名が読めなくなるのを避けるため、薄い色合いが採用されたと思われる（九大本と福岡県立図書館本を比べると、九大本が全体的に薄いが、色彩の仕方にはそれほど大きな差はない）。

【注】
（1）マティ・フォラー他『シーポルトと日本』Institute of Leiden, 2000年。
（2）（4）『シーポルト『日本』』第1巻、277頁、1937年。
（3）『シーポルト探集日本図書目録』『シーポルトの『日本』の研究と解釈』、講談社、1977年が目録を収載している。
（5）『シーポルト『日本』』図録第1巻、687頁、『日本興地図全図』のシーポルトによる解釈（単行本、1979年）。

ライデン大学図書館蔵 文化8年「改正 日本興地図全図」
[31〜34] NIPPON I 第1図 (c) 日本輿地路程全図 —九州、四国、関東、中部地方、奥羽地方—
第5・6・7回配本(1893年)の色付き図版

第5・6・7回の配本年代は不明であるが、第7回配本は配本日頃の「INHALT」に係るシーボルトの報告から1893年であることがわかる。これまで、1年に1回のペースで配本されてきたことになる。

第5回配本の内容は、本文が「NIPPON」Ⅱの江戸参府旅行記であり、図版は長崎から小倉下関までの風景画17枚が配られた。原画は川原蔦貫のスケッチであり、彩色されていた。「NIPPON」のなかでは色なしで出された。第6回配本は本文が江戸への旅行記となっているが、原版21枚は安達太良（呉田多良）から薩摩の桜島まで20か所の山々と、シーボルトの日本妻「おたくさ」の肖像画であった。この辺りから本文と図版の対応は崩れだしてくる。

第7回配本は合併号であった。それまで1分冊ごとに配本されていたが、7回配本は7-8分冊の合併号であり、図版の枚数は倍増した。41枚のうち6枚に彩色がある。本文と図版はまったく対応しており、本文は「NIPPON Ⅲ」の朝鮮に関する記述。図版は日本の軍事情報と花瓶・香炉などの画であった。戦争用具や歩兵・騎馬武者の畫に彩色があり、一部は牲畜ノ着が描いたものを原画としている。北斎の原画はライデン国立民族学博物館にシーボルトコレクションとして保存されている(1)。

「戰争用具」の采配や軍配・陣幕を描いた画をみると、九大本は彩色されているが、福岡県立図書館本は色なしである。福岡県立図書館本はクオリティ版。2折判(大判)の豪華版であり、本来ならば彩色されているはずである。決して色なしの4折判(小判)が挿入されているわけではない。この他にも福岡県立図書館本は無彩色の図版をいくつか含んでいる。その理由として考えられるのは、シーボルトが彩色予定の図版のいくつかを色なしのまま保存したことにによると思われる。クオリティも彩色せずそのまま販売した結果、あるものは福岡県立図書館本のように無彩色の図版が含まれ、あるものは彩色図版が描かれたこととなった。

クオリティ版のOAG(ドイツ東洋文化研究会)本と九大本を比べると、ほとんど同じといえるが、相違の丸が大きく違う。OAG本が北斎の原画に沿っているが、同様の色を他の「NIPPON」で未だ見たことはない。また、同じくクオリティ版の神戸市立博物館本では淡い黄色となってている。こうした細かい部分における彩色の違いは、一人でなく、数人の人々によって彩色されていたことを示している。このことは以後の図版でさらに明らかになる。

[67]「戰争用具」も北斎を原画としており、福岡県立図書館本は色なしで、神戸市立博物館本は点線の部分を黄色で統一している。現在のところ、この色づかいは1例のみで、他は九大本と同様原画に沿って赤色で塗られている。

[73]「歩兵」は、福岡県立図書館本は色なし、初版の長崎歴史文化博物館本と九大本を比べると、左下にいる歩兵の服裝の彩色が異なる。歩兵の服裝は青・紫・緑色で塗られおり、それぞれの「NIPPON」で微妙に彩色が異なっている。

[74]「歩兵」も福岡県立図書館本は色なし、OAG本をみると、歩兵の足下に緑色を塗り、服装にも緑色を多用している。

[75]「騎馬武者」も福岡県立図書館本は色なしで、神戸市立博物館本では点線の箇所が異なる。

[76]「最高指揮官」も福岡県立図書館本は色なしで、OAG本と九大本を比べると、眼に赤色を塗るやり方がまったたく違った。しかしOAG本の背景には水色の空がある。九大本のもよくと背景に水色が薄く塗られているが、その方法は違っている。

以上、第7回配本は「INHALT」に係るシーボルトの報告によると、前回の配本から少し時間が経っているようであり、彼は配本が遅れたことを認めている。7-8分冊の合併号として出すために、それまでの倍の図版を用意せねばならず、より多くの図版に色を塗らねばならなかった。その結果、これまでには見られなかったほどに色合いの違いが見立ってきた。

注
(1)「武芸遊武観奇」に著書・北斎の著書はないが、オランダ総領館が看了された北斎の案としている『シーボルトコレクション』は1980年に刊行された。「シーボルトコレクション」(長崎県立歴史博物館出版部発行、1980年)。
[66] NIPPON II 第8図 (c) 戦争用具
[67] NIPPON II 第9図(c) 戦争用具

[73] NIPPON II 第15図(c) 歩兵

[74] NIPPON II 第16図(c) 歩兵

[75] NIPPON II 第17図(c) 騎馬武者
[76] NIPPON II 第18図(c) 最高指揮官

九大本

クオリッチ版 OAG本

福岡県立図書館本
第8-9回配本の色づき図版

第8-9回の配本年代は不明である。9回配本は9-10分冊の合併号。10回配本も11-12分冊の合併号だった。それと同時配本だった。図版を「[INHALT]」から判明する。第8回配本の「[INHALT]」と第9回配本の「[INHALT]」は同じ紙に印刷されており、合併号となっている（1）。分冊で配本された「NIPPON」を製本するたびに変わるが、九大本は未製本であるので明らかにできた。

第8回配本の本文は、前回配された軍事に関する図版の解説と、新日本参議院の追加記事、朝鮮の「千字文」に関する報告であった。9回配本は合併号だから1枚。そのうち色つきは最大の15枚。内容は身分ごとの日本人の装束を模様とする結婚式・葬式などの風習に関するものだった。前回配本の「[INHALT]」において、シーポルトは300枚以上の図版が完成しており、遅れることなく刊行すると記しているが、本文と図版の乖離はますます激しくなってきている。

[124][125]「町人の服装」は、黒金箔の絵を着た裕福そうな町人、裕国の着物を着た婦人を描く。ともに福岡県立図書館本は色なしであり、長崎歴史文化博物館本と比べると、九大本は少し色合いが違うが、それほど大きな差はない。

[126][127]「礼装」は、徳川家康の御上着を着た大小姿の武士。モダニズムの高木版をした花魁を描く。ともに福岡県立図書館本は色なし、1930-31年のトラウバー復刻版と九大本を比べると、武士の着物や色の色合いが少し異なり、花魁の装束が少し異なっている。

[128]「従者を連れた身分の高い日本人」にはいくつかのパターンがある。左側に小名を連れた身分ある武士、羽織・袴に紬の大小を差し、手袋をはめている。従者は後ろに木刀を差していないが、色っている姿である。原画と思われる絵師板倉氏の水彩画がライデン国立民族学博物館にあり、手足の男性的な外見を描く線を描くものに、北斎の筆跡のある筆法が認められるという（2）。これを石版画に描いたエクルスレーベンは、従者がもう風呂敷の用途・実体がつかなかったのか、すっかり省いている。石版画を彩色していく時にいろいろのパターンが生じた。まず、福岡県立図書館本では他にない雲が加えられており、従者の足を塗り忘れている。九大本では武士の姿・刀の繊に色はないが、初版の大英図書館本・長崎歴史文化博物館本・慶応大学本・およびオランダ版の永青文庫では赤く塗られている。これに対し、オランダ版の神戸歴史博物館本・天理大学本や1930-31年のトラウバー復刻版では帯が緑に塗られている。これは明らかに何人の手法による別々に彩色された結果である。

[129]「上流の婦人」は、桜を着て髪にはなんだ娘らしい飾りをつけている。上のことく比べると、あまり差は見られていな。

[130]「農民」は、柳を額に乗せている京都の大原女、担い棒の前後に反物や野草などを入れた半農半商の男、銅の駄をもつ老人を描く。原画はミュンヘン国立民族学博物館のシーポルトコレクションに収蔵。作者は川原慶賀であり、109歳の老いぼろ人物画が1冊の画巻（分冊「人物画巻」（3）に掲示されている。川原慶賀はこの3人を一緒に描いていないが、シーポルトは3人をまとめて「農民」とし「NIPPON」に載せ、原画にない背景も追加している。服の色を変えているが、3人の姿はかなり忠実に写している。「NIPPON」の彩色に多少の違いはあるが、それほど大きく違えていない。

[131][135]「帝（天皇）・帝（皇后）」について、シーポルトは江戸参府の自筆「日記」（2）のなかに書いてている。もちろん天皇に会ったわけではないが、江戸参府の歴史、京都の宿に友人の「肥後介」とやってきて、「彼は家から宮廷で着る衣装をもって、天皇や宮中の人々の事はご家庭の服装で教えてくれた」（64）である。この後、受領・狩衣・鳥羽子などの衣装について細かく書いていく。天皇・皇后に描いた画の主題は衣装であったとされるが、彩色にはかなりムラがある。例示しているように、天皇も皇后も彩色の仕方がバラバラであり、この他の「NIPPON」と比べてみると、いくつかのパターンに分類できないほどに過ぎている。何人の手によって塗られた結果であり、かなり「雑」である。

[137]「公家の宮廷服」（141）「帝の側室（宮中の女官）」も服装について描く。鶴帽子に白糸を着た天皇・公家の帯服（右圖）。左側は衣冠の様式と写実化を描
いている。女官についても女が平日装、左が略式礼装なのでだろうか。シールド「日記」、「お部局はスポンに出された独特の長衣を着ている。赤い色をしている」とあり、京都で衣装を見せてもらった。色彩の相違は天皇・皇后ほどに激しくないが、犬の首輪を塗り忘れたり、赤の色合いが大きく違っている。

【142】「将軍」は、亀与子に弔衣・指貫の帯を着た立ち姿、シールドの扉の前で将軍は慄川家斎であった。

【143】「将軍の御物姿」は内衣に和服・表着を重ね、その上に唐衣を着て、腰には帯や花の装をつけている。将軍の色彩では、若汁の模様の色に違いがある。これに比べて、御物待はどの「NIPPON」よりも丁寧に塗られているが、例示しているように、九大の帯と扇子は黄色が薄い。永青文庫版のような色合いが多いようである。

【144】「武家の礼装」は、左が五官以下の武家の式服、右が長上下の書装・礼装であり、大名や上級旗本の服装を描いている。色彩の相違は、九大本と長崎歴史文化博物館本系統に大きく分かれる。【145】「大名の妃」は手拭の小袖を着て、髪を後ろに長く重ね、手には虫などを追い払うように着ている。手拭の色彩は丁寧に塗られているが、違いないが、手拭の色は細かい、点が微妙に異なており、何人かの手によって塗られたことがわかる。

第9回配本は8回配本と同時であり、図版35枚に付図「原図と日本人作成による天体観測に基づく日本国地図」が配られた。ここでも本文と図版はほぼ並んで近く、本文は「NIPPON Ⅲ」神話・歴史であるが、図版は楽器・風習・肖像画となっている。彩色された図版は琵琶・琴・三味線などを奏でるの4枚の画であった。

【248】「楽器・楽音・琴」は、下を壈琴としているが、現在見られる典型的なものは幾分遅れている。上には中国の琴を弾ける画であろうが、手に桐を着けるなどの不正確な部分もある。【249】「楽器・楽音・琵琶」は、盲僧が演奏する琵琶と、婦人が弾ける挿を描く。【250】「楽器・三味線・鼓弓」は、盲僧の弾く4弦の鼓弓と三味線をひく女性を描く。女性は重ね着をした下着の帯・飾り共でおあり、女郎ではないかと思われる。よく見ると、彼女の唇には青色が描かれている。この化物について、喜田川守貞『近世風俗志』(5)に「近来は絵を濃くして唇を青に光光するは何事ぞ」とある。三味線をひく女性は文化・文政期(1820年頃)に流行した「錦色紅」をしていているのであろう。やはり青い唇の流行は長続きせず、天保頃には淡い紅に戻ったという。3点の図版の色彩は、8回配本の彩色図版と比べるとかなり丁寧であり、あまり相違は見られない。

【254】「面をかぶった踊り手・鬼・狐・獅子」は、各地に伝わる民俗芸能を描いたものであり、原画は川原慶貴『人物画帖』のなかにある。シールドは、それぞれ別々に描かれた踊り手を一枚にまとめ、背景も追加されている。石版画家の名前は下に「van straaten」(アン・ストラート)とあるが、彼の詳細は不明である。左の鬼面をつけた踊り手の原画には、越後獅子・角兵衛獅子というメソ書きがある。しかし、かなり印象が違う。川原慶貴は現在の佐賀県から長崎県一帯に分布する「面流虫」をモデルにしたと思われる。今も鼓・太鼓・笛にあわせて鬼面をつけた「かけうち」という占那が太鼓を叩きながら踊る。中央の狐面について、原画には「冬期、狐の穴に参詣する信者」と文あるが、稀客神社に参詣する人物といえ、右手に鍋をもっており、異様な姿である。左の獅子面は、額に「王」の文字があり、現在も長崎地方では「王」の字を記した緑色の獅子頭が使われている。彩色については、原画と比べてみてでも、それはほど大きな違いはなく、かなり忠実に色彩されている。ただし狐面はアレンジされている。

以上、第8-9回配本は合計20、合計配本だったので、配られた彩色図版は多く、19枚に及ぶ。シールドは、大量の図版に色を塗らなければならない。これまで以上に多くの人々に依頼して色を塗らせて結果、天皇・皇后の図版に見られるように、かなり「雑」な色彩が多くなっている。

【注】
(1) 宮崎克則『合丸シールド・NIPPONの配本』(九州大学総合文化博物館研究報告第119、2002年)。
(2) オランダ国立ライデン民族学博物館 シールドコレクション 秘蔵
(3) 『人物画帳』、『通院朝日百科 新刊増補 日本の歴史』(2002～2004年)121号に「江戸時代人物画集」と題して紹介されている。
(4) 喜田川守貞『シールド-参詣者手記の日記』134頁、岩文館、1983年。
(5) 喜田川守貞『近世風俗志』2巻、岩文館、1997年。
[124] NIPPON II 第1図(e) 町人の服装

[125] NIPPON II 第2図(e) 町人の服装

[126] NIPPON II 第3図(e) 礼装
[127] NIPPON II 第4図(e) 礼装

[128] NIPPON II 第5図(e) 従者を連れた身分の高い日本人
[129] NIPPON II 第6図(e) 上流の婦人

[132] NIPPON II 第8の2図(e) 農民
NIPPON II 第10図 (e) 帝 (天皇)

九大本
福岡県立図書館本
初版 長野歴史文化博物館本
トラウツ復刻版
[135] NIPPON II 第11図(e) 后 (皇后)

九大本

福岡県立図書館本

初版 大英図書館本

クオリッチ版 神戸市立博物館本
[137] NIPPON II 第13図(e) 公家の宮廷服

[141] NIPPON II 第17図(e) 帝の御室(宮中の女官)

[142] NIPPON II 第18図(e) 将軍
[143] NIPPON Ⅱ 第19図 (e) 将軍の御台所

[144] NIPPON Ⅱ 第20図 (e) 武家の礼装

[145] NIPPON Ⅱ 第21図 (e) 大名の妃
[254] NIPPON IV 第13図(c) 面をかぶった踊り手
[6]第10回配本の色つき図版

第10回の配本年代は不明。これは13-14分冊の合併号であり、本文は「NIPPON Ⅲ」の神社・歴史についての補足文と図版に関する記述。図版数は40枚。本文と関係するのは毎月時計を描いた5枚だけで、その他は本文に関係のない寺社の全景図や僧侶・神主などの人物画である。彩色図版は8枚にのぼる。

[301]「仏教 観音寺（本堂）内」は、慶長期、長崎に建立された曹洞宗の禅寺。[300]の図版で全体の伽藍配置を描き、次に本堂の内部を彩色で紹介している。福岡県立図書館本も彩色されており、九大本と比べると、釈迦・文殊・普賢を安置した御の両側にある灯籠などの色合いが違うが、他所は似ている。

[306]「仏教 浄土宗 大次寺（伽藍）室内」は、江戸初期に建立された長崎の浄土宗寺院。前の図版で伽藍配置を、この画で本堂の内部を彩色で紹介する。天井に天蓋のある本堂の色彩は、九大本・福岡県立図書館ともに豊や天井の色合いが違うが、それよりも色の塗り方が豊かな。永青文庫本・OAG本・長崎歴史文化博物館本なども同様であり、上手い彩色とはいえないと。

[310]「仏教 真言宗 本願寺（本堂）内」は、長崎最初の日蓮宗寺院。ここでは本堂の内部を描いた後には本堂内部を紹介している。須弥壇の中央に本尊南無妙法莲華経題木造多宝塔。左右に釈迦如来与多宝如来の宝塔がある。九大本・福岡県立図書館本ともに彩色は似ており、色ムラもある。そして[301]と同じように灯籠の色合いが違う。他所の「NIPPON」をみると、九大本のような色合いが多いようである。

[311]「仏教 真言宗 大徳寺観音堂内」は、真言宗の大いきな寺院であったが、明治以降に廃寺となり、観音堂も現在は失われている。この画が往昔の面影を伝えるものである。九大本・福岡県立図書館本他に、1930-31年のトラウラ復刻版も例示した。彩色の色ムラは九大本・福岡県立図書館本および他所の「NIPPON」にもあるが、トラウラ復刻版ではほとんどない。ライデン国立民族学博物館のシーボルトコレクションに残る原画（作者不明）と比べると、トラウラ復刻版がもっとも丁寧な彩色であることがわかる。

トラウラは復刻版の作成において、完全に近いものだけでも37〜38部の「NIPPON」を対校し、とくに、そのなかの優れたものを使いこなした。復刻版を印刷する際、色つき図版は色刷されただけでなく、手彩色が施されている。肉眼で見ると、濃い色の部分に手塗りで塗った跡を確認できるし、時には絵の具がはみ出していることもある。1975年に講談社が出版した復刻版は完全な印刷であったが、200部限定（1）のトラウラ復刻版は、初版「NIPPON」に近い彩色となっており、講談社のものはまるで違う。

[313]「仏教 真言宗 浄土宗・山伏」は、上の2人が神主、下が山伏である。右側の神主は、衣冠帯に笏をもつ姿から宮中の文官が正装した姿と考えられ、彼らが勧使として神社を訪れたときの姿を描いたのではないかと思われる。「神主の原画はライデン国立民族学博物館にあり、作者は川原慶豊ではないかと思われる。」『講』作者は川原慶豊ではないかと思われる。『講』作者は川原慶豊ではないかと思われる。『講』作者は川原慶豊ではないかと思われる。『講』作者は川原慶豊ではないかと思われる。』とある。講談社本の彩色はライデン国立民族学博物館にある。原画に沿って彩色されており、どの「NIPPON」もほぼ同じである。

[315]「仏教 禅宗・浄土宗・一向宗の僧」は、上の2人が禅僧、下の左が浄土宗の僧、右が一向宗の僧である。いずれも讃絵の衣を着て袈裟を背いている。禅僧の1人は、浄土宗の僧については、原画がライデン国立民族学博物館にある。原画に沿って彩色されており、どの「NIPPON」もほぼ同じである。

[316]「仏教 法華宗・真言宗の僧・勧進僧・盲僧」は、上の右側が法華宗の僧侶。通常は杖をつが、ここでは「バチ」で「カネ」をなさっている。下の右側が真言宗の僧侶で、五条袈裟を着て錦杖と数珠をもつ。原画はライデン国立民族学博物館にある。下の左側は勧進僧であり、寺の「建立」を訴えながら各地を巡り資金を集める。この原画はミュンヘン国立民族学博物館の「人物画集」のなかにある。原画の小旗は青色で「本堂建立」とある。上の「NIPPON」では地に「建立」とだけ記され、肩の布袋
や服の色も変えられている。上部の左が盲僧の琵琶法師である。原画はライデン国立民族学博物館にあり、それには沿った彩色となっている。もともと、僧たちを描いた原画はシーボルトの手許にあったが、現在は一部がライデンにあり、一部はミュンヘンにある。コレクションが分散したことによる。九大本と福岡県立図書館本の彩色は、真言僧の袈裟の色合いが違うが、他はほぼ同じ彩色である。福岡県立図書館本にみられる袈裟の色合いは、OAG本にもあり、他は九大本のように赤い。

【317】「仏教 巡礼・山伏・尼僧と童女・大黒舞という乞食」は、右上が巡礼者で、足袋をつけ手に杖と数珠をもつ。左上が須弥東の山伏、仏具や衣服をいれた箇を背負う。左下が尼僧とやや幼児に見える童女、右下の2人が大黒舞と呼ばれる乞食。頭巾や仮面をかぶって大黒天に扮装し、門前で歌をうたい弦楽器を弾いて米飯を乞う。この『NIPPON』もほとんど相違はなく、かなり均質な彩色となっている。

以上、第10回配本で出された8枚の色つき図版は大きく2つに分類できる。4枚の寺院本図版はどれも色ムラが日立ち、彩色した人々のレベルはあまり高くない。これに対し、僧を描いた4枚の図版ははるかに丁寧で均質な彩色であり、別グループの人々が担当している。前回の第8・9回配本において、「雑」な彩色図版がいくつかあったが、寺院図はそれと同じ人々が彩色したように思われる。

【注】
（1）講談社が『NIPPON』を復刻する際の広告（※は文庫版）、トラウツ版は200部限定であり、講談社復刻版は485部（本+CC1）を7万円で販売する、とする。
（2）『オランダ国立ライデン民族学博物館 シーボルトコレクション 祖霊浮世絵』（藤尾書、講談社、1978年）。
[301] NIPPON V 第56図 仏教 喜多寺本堂の内部

[306] NIPPON V 第61図 仏教 法華宗 大音寺観音堂 内部

[310] NIPPON V 第64図 仏教 法華宗 本蓮寺の堂内
[311] NIPPON V 第65図 仏教 真言宗 大徳寺観音堂 内部

九大本

福岡県立図書館本

トラウツ復刻版

部分拡大、トラウツ復刻版

原画：ライデン国立民族学博物館蔵
[313] NIPPON V 第67図 神道と仏教 神主・山伏

[315] NIPPON V 第69図 仏教 禅宗・浄土宗・一切宗の僧
[316] NIPPON V 第70図 仏教 法華宗・真言宗の僧 勧進僧 盲僧

[317] NIPPON V 第71図 仏教 巡礼・山伏など
第11回配本は合併号でなく、15分冊が出た。本文は「NIHON II」との江戸参府の後半部分であり、具体的には下関から瀬戸内の島を含む記述であった。結局、その後の江戸までの旅行記は出なかったが、東洋文庫「江戸参府記行－ジーボルト－」（斎藤信次、平凡社、1967年）には江戸滞在の様子、長崎への帰路に至る記述がある。室に降らぬ記説は、シーボルトの息子たちが編纂した第2版「NIHON」（1897年、明治30年）に含まれるのであり、初版「NIHON」にはなかった。2版は、初版の内容を削除されたり、追加された部分が多く、内容的にも形態的にも異なる。室から先の記事は、アレクサンダーとハインリッヒが父シーボルトの原稿や日記をもとに修正・追加したものである。

初版で出された図版数は20枚、そのうち17枚は下関から江戸の永代橋に至る街道そのもの。3枚は「NIHON VI」の産業に関する狩猟・漁業・捕鯨を描いた図版であり、彩色されたものは一枚もなかった。

第12回配本も合併号でなく、16分冊を出す。本文は「NIHON VI」の産業・貿易についてであったが、配られた図版20枚は「NIHON II」の日本人の容姿や家具を描いた16枚、「NIHON III」の貨幣図2枚であり、「NIHON VI」については農村風景を描いた2枚のみで、本文と関係する図版はほとんどない。彩色された画は日本人の容姿を描いた2枚である。

(51)-(52)「国民の容姿」は、ともに原画は川原慶賀(登与助)であり、左下に「Toioske ad nat del」とある。ライデンにも、ミュンヘンにも原画そのものは見当たらないが、慶賀の人物画をもとにエル・クレスベハンが石版画にしたもの。

彩色の仕方は、九大本・福岡県立図書館本、その他の「NIHON」においても多少の色合いの違いはあるが、ほぼ均質である。これまでの合併号や合併配本では多量の彩色図版を配らねばならず、色ムラのあるものがあったが、12回配本は初期の配本のように1分冊となってお
[51] NIPPON II 第17図 (a) 国民の容貌

[52] NIPPON II 第18図 (a) 国民の容貌
第13回配本（1851年）の色つき図版

第13回配本は1851年に17〜20分冊の4号合併で出た。本文は「NIPPON I」「NIPPON V」「NIPPON VI」「NIPPON VII」の各紙にまたがっており、それまでに出ていない部分が補充された。図版数は66枚（うち2枚の図版は同一紙に印刷されている）、約半分の31枚は「仮想図巻」を含む仮想図巻である。「仮想図巻」は、土佐将軍記の信を含む仮想図巻で、800を越える図を取扱い、簡単な解説を加えたものである。初版は元禄3年（1690年）であり、その後増補され何度も版を重ねた。シート名が持つったのは寛政8年（1796）刊「増補諸書 仮想図巻」5冊であり、今はアイデン大学図書館にある。

13回配本の配本目録「IN HALT」には、「in September 1851」と日付されたシート名の報告がある。それには、本文と図版の明け洗したページや図版に対する苦情への返答が書かれている。シート名はあと2冊の配本で終わること、1852年に刊行すること、図版と本文の間に「系統的な秩序」をつけること約束しているが、それは実現できなかった。1851年の第13回配本の後、「琉球諸島」等に関する本文が1857〜58年頃に出たというが、9本は13回配本で終わっている。

図版66枚の中、彩色されたものは蝦夷・樺太の習俗を掲載した4枚にすぎない。4分冊の合本であるから、それまでの例からすると、もっと多くの彩色図版が出されるべきだし、意外に少ない。

蝦夷・樺太に関する「NIPPON」の本文は、間宮林蔵「東風地方紀行」「北海分界界話」の翻訳である。シート名は本文の注解で次のように記している。

彼（間宮林蔵）は「東風紀行」（To-tats ki ko）すなわち東部タカリア地方の旅を著し、旅した土地に関して多くの写生や地図を付し、その写本を江戸の幕府文庫に収めた。ヨーロッパの航海家と誤ったことをしない樺太やあまり知られていない黒竜江地方の土地や住民についての貴重な情報が、われわれの1826年江戸滞在の後、幕府にお申の天文学者吉川作左衛門によって知られ、その後、われわれの日本の人々、Ts Ts吉雄信次郎の仲介でその写本を手に入られたことであった。しかし残念なことに、1829年幕府による取調案の際に、われわれにして始末する日本の友人を殺すために、この写本と付録の写生画を長崎奉行に渡すはめになった。幸いにも、当地の学者がTsのとはかくで、写本の翻訳者と写生画の数枚は手放さずにすんだ。これは、われわれの「NIPPON」に若干の写生画と注解を付けて解説する。

「北海道界界話」は文化5年7月〜8月、間宮林蔵・松田伝十郎による第1次樺太調査の記録であり、アイヌ・スレ・マウルールなどの習俗を記述する。「東風地方紀行」は、間宮林蔵が文化6年（1809）1月から8月末におよぶ第2次樺太・山旦（黒竜江下流地方）調査記録であり、樺太半島説を採り、サハリンと樺太が同一であることを指摘したものである。流布本が「東風紀行」を知られる。この両書は、文化7年に間宮林蔵が口述した内容を松前奉行所の下村重助が筆録したもので、翌8年に浄書して幕府に献上した。シート名も「幕府文庫」に記される。現在は国立公文書館に所蔵されている（とともに重要文化財）。

シート名は上の注解のなかで「東風紀行」と記しているが、「NIPPON」には「東風地方紀行」「北海道界界話」の両書が掲載され、掲載は「北海道界界話」から採用されている。他は、天文方兼御書物奉行の高橋作左衛門（信保）案内で、「幕府文庫」の「紅葉山文庫」を密かに計画したとき（2）、伊藤忠敬の日本語の信をこらえたものである。写本を作成したのは、高橋とシート名の通訳を務めて、天文方の翻訳家であった吉雄信次郎であった。

間宮の報告書は吉雄が翻訳を担当したが、写生図は彼ではなく、川原慶賀が作成している。上記の注解にある長崎奉行に提出したという写生図は、現在、東京国立博物館に所蔵されている。それは「樺太風俗図」に題され、縦65cm×横45.5cmのオランダ紙に彩色された65枚の絵が収められている。表紙内側に貼り付けは、長崎でシート名から取り上げたものとされている。 「樺太風俗図」の貼り紙は、文政9年、シート名とともに描かれており、シート名が高橋景保と最上谷内らと会う際に在席して細部にわたる描写や風俗について説明を受けたと考えられる。
ている(3). 慶長が描いた65枚のアイヌ習俗画は幕府へ差し出されたが、いくつかはシールドの手許に残っており『NIPPON』に掲載された。現在、その一部はライデン国立民族学博物館に残る。

[352]「蝦夷（宗谷崎） アイヌとその住居」は、宗谷崎のアイヌとその住居を描く。ライデン国立民族学博物館のシーボルトコレクションに登場16m・幅30cmの『蝦夷風俗図巻』の絵巻があり、後景の人物図が部分的に利用されている。『蝦夷風俗図巻』の作者は、蝦夷地松前在住の春里と伊藤昌。落款に「松前春里」とあり、「松前」は姓でなく、「松前の住人」という意味である。

[353]「蝦夷（松前） アイヌのオムサ祭り」は、祭壇に生蒸しの熊を飾り、演舞している図であり、『オムサ』「アイヌ」である。タイトルに「オムサ OMSIA」とあるが、誤りである。「オムサ」は蝦夷各地の先住民に対する説話のこと、松前藩主の説話伝承記伝書「ウイマム」に見える。この仮面画ライデン国立民族学博物館にあり、「千鳥春里」の署名と「藤原」「昌」の名がある、『蝦夷風俗図巻』と同一人物の作である。シーボルトは『NIPPON』の注で、原画の入手経路について記している(5).

松前を含む日本人が描いたオムサ祭りの絵を、われわれの友人ソシュロが手に入れた。1775年に描画された。蝦夷のアイヌはふつう、秋の阿里にこの祭りをする。

「ソシュロ」とはオランダ語の馬場佐十郎であり、彼が文政9年(1812)に松前へ出向した際に入手したものである。同じ作者の『蝦夷風俗図巻』も馬場佐十郎を経由してシーボルトの手に渡ったと考えられる。シーボルトはこの画を川上康賀に描き直させている。それはライデン国立民族学博物館に残っており、下部にあるタイトルにシーボルトの筆跡で「OMSIA」と記されている。この時点で間違ったようである。彩色については、霞の画に比べて、コザの色合いが違うが、かなり忠実に彩色されていることがわかる。他所の『NIPPON』の彩色もほぼ同じである。

[354]「蝦夷（松前） アイヌが爵物や商品を運ぶ」は、「ウイマム」のために松前へやってきたアイヌが、後の年にある船から仮設小屋に商品を運ぶ図である。原画は『蝦夷風俗図巻』の中の一つである。

[355]「蝦夷（松前） アイヌが爵物や商品を運ぶ」は、小型のアイヌの役物を赤色で塗られた長崎歴史文化博物館本庁舎と兼用本木本と、そうできないグループに分けられるが、大きな差はない。

[356]「樺太 オロッコとスレングルク」は、北カラフに住むオロッコとスレングルクの風俗を、間宮林蔵の『北冥界民業』の様式にとづいて描いている。『NIPPON』によると、彼らはアイヌと異なり、言語も違うという。定住せずに群れをなし、運動の彼らの習俗を描いたこの画の注記として、シーボルトは間宮林蔵のスケッチを基にしたものだと思われる(6)。前景のトナカイは、とりくがオロッコ人、トナカイは捕獲した犬と飼猫、魚が木皮の覆いであるペットを運んでいるという。彼の木をもった男を揃った男が子供を乗せた歓迎・飲食をもった漁師などはスレングルク人のあり、樺太のアイヌが建てるような夏の住居を遠景に描いているという。

『北冥界民業』全10巻と見ると、7・8巻にあるいくつかの數冊を合体させていることがある。川上康賀が描き直した画があったと思われるが、未だライデンでは見出していない。ただ、シーボルトが長崎奉行に提出した『樺太風俗図』のなかに、慶長が描いた原画と見えるのが数点あるが、トナカイが描かれていなかったりして、シーボルトは別の画を入手していたと考えられる。彩色についてはほんの『NIPPON』はほぼ均質である。

以上、13回目の彩色図版は12冊の合併号であるにもかかわらず、4枚のみであり、初期の配色のように丁寧に着色されており、差違は何となくかかった。13回目までに配列されていない「京都の風景」、「江戸の風景」の図版を含むクリティック版『NIPPON』があるが、それは白黒の石版画であり、彩色のある図版は今回が最後であった。

注(1)「シーボルト[日本]」6巻、13-14頁、雄山閣、1979年。
注(2)「東新二[文政十年のスペイン合戦]」171-178頁、文春春秋、1996年。
注(3)佐々木村治『シーボルトの研究』125-126頁、華蔵書、2004年。本書によると、慶長が描いたのは蝦夷上本ではなく、長崎県広島市にあった蝦夷上本で、文政12年(1829)に現在国立公文書館に収められている『蝦夷紀行』などがそれに類すると。
注(4)佐々木村治『シーボルトの研究』34-37頁。
注(5)「シーボルト[日本]」6巻、57頁、雄山閣、1979年。
注(6)「シーボルト[日本]」6巻、62頁、雄山閣、1979年。
[352] NIPPON Ⅱ 第16図 蝦夷（宗谷岬）アイヌとその住居

九大本

[蝦夷風俗図巻]、ライデン国立民族学博物館蔵

アイヌ人物図（男）、川原隆賀、ライデン国立民族学博物館蔵

アイヌ人物図（男女）、川原隆賀、ライデン国立民族学博物館蔵
[353] NIPPON VII 第17図 蝦夷(松前)アイヌのオムシャ祭り

九大本

アイヌ踊りの図。川原慶賀。ライデン国立民族学博物館蔵

熊送りの図。千崎春里。ライデン国立民族学博物館蔵
[354] NIPPON VII 第18図 蝦夷（松前）アイヌが貢物や商品を選ぶ

九大本

『蝦夷風俗図巻』、ライデン国立民族学博物館蔵

The Study of Comparing Color Prints in NIPPON VII
3.『日本植物誌』（Flora Japonica）と『日本動物誌』（Fauna Japonica）

シープルトは2人の助手とともに『NIPPON』を執筆した。それは、郭成章とホフマンであり、郭成章は（中国）広東大埔県の一人で乾坤堂主人と号し、中国語・マレー語でシープルトを助ける。シープルトは来日する以前のジャワ島で郭成章を知り、そのまま日本・オランダでも彼を囲った。ホフマンはシープルトと同郷の（ドイツ）ビルツブルク生まれで、帰国後の1830年にアントウェルのホテルでたまたまシープルトと知り合い、その助手となる。美声の持ち主でオペラ歌手となることを志していたが、後にライデン大学日本学講座の初代教授となり、多くの日本に関する著作・論文を発表する(1)。

これに対して、『日本植物誌』・『日本動物誌』ではそれぞれの専門家の協力があった。『日本動物誌』は、シープルトが日本において採集した膨大な動物標本や川原慶賀などの日本人絵師が描いた下絵をもとに、ライデン国立自然史博物館のジョン・シュレーゲルによって研究・執筆され、1833年から1850年にかけて5つの部に分け、1851年に刊行された。シープルトは彼らに原稿料を払っており、『NIPPON』と同じく自費出版であった。シュレーゲルは3780ギルダーの原稿料をもらったと自伝に記している(2)。

鳥類(330種) Aves 1844-1850 12分冊
魚類(330種) Pisces 1842-1850 16分冊
有鱗類(182種) Crustacea 1833-1850 8分冊
無脊椎(27種) Mammalia 1842-1844 3分冊
有虫類(52種) Reptilia 1834-1838 3分冊

シープルトの予定では、各分冊は図版10枚・本文3〜4ページ、25分冊で完結の計画だったが、結局は43分冊となってしまい、無脊椎動物は有鱗類の部だけが完結し、その他は未完となっている。合計して313種類が掲載で、日本を代表する動物がヨーロッパの学会に紹介された。ホンドカヌキネコホオカミ・ニホンゾウ・マダラ・イサダイ・メガネイサなどが美しい手彩色の図版で記載されている。図版は主に標本にもとづいて作られているが、魚類編は川原慶賀の絵によってある。慶賀の絵は、現在でも図鑑の原画としてそのまま使用できるほどの精緻で描かれている。という(3)。

『日本植物誌』は、シープルトも著者の中の1人であった。当初、本文はミュンヘン大学の植物学教授ツッカーリが分類学的見解をラテン語で書き、シープルトはフランス語で植物の生息地・分布・栽培状況・日本名・利用法などを書いた。フランス語での記述は、広い範囲の読者を得るためであり、植物学者や園芸家の関心を引く観賞植物や有用植物を中心に紹介している。『日本植物誌』は2巻構成で、それぞれの巻に100枚の図版が含まれる予定であった。1巻の第1〜2分冊は1835年にシープルトによって刊行され、1841年に完結した。翌年には2巻の第1分冊が出たが、1844年に2巻の第5分冊を出た後で中断する。そして、シープルトが死去した後の1870年にミヒェルによって2巻の第6〜10分冊が出た。

掲載された植物は1140種、ウツギ・オオアカマツなど52種は学名未認の新種だった。図版は植物標本や川原慶賀などの下絵をもとに、近代流の植物画家たちによって石版に描かれ、手彩色が施されている。刊行には膨大な費用が必要であったと思われる。シープルトは、国芸の価値のある野生植物が少なかったヨーロッパに日本の植物を導入するため、園芸植物をライデンに持寄、「シープルト商会」を設立して国芸用の日本産植物の球根や苗・種子を販売した。筆頭は「カヌドウリ」で、その球根は同じ重さの金と引き換えられたといわれる。植物販売による利益は、膨大な出版費に充てられたと考えられるが、1844年以後は刊行を中断させるを得ないほど、経済的に困っていた。そして1848年にツッカーリも死去してしまい、「日本植物誌」はそのままとなっていた(4)。

『日本植物誌』・『日本動物誌』の初版本は数種類しか見えていないが、『NIPPON』の彩色図版と比べると、明らかに違う。とくに『日本植物誌』の図版は絵葉であるだけでも、植物学的正確さにおいても欠け、出版当初から高い評価を得ていた。その図版の下部には一部を除き、画家と製版師の名前が記されている。画家としてもっととも多く描いたのは、ミヒシスター（Mingsinger）であり、彼は当時全盛期だった他の著名な大型植物図譜の図版作成にも関与していたはずだった植物画家であった(5)。

植物の石版画を手彩色したのは誰なのか不明ながら、
『NIPPON』の彩色を依頼した人々とは大きく異なる。そのことは、シーボルトの日本郵の愛称をつけた「オタクサ (アシサイ)」と「カノコユリ」図版を拡大図とともに掲載しているので、明らかであろう。編部にいたるまで細密に、そして丁寧に手彩色されている。

（注）
(1) 柳澤武雄『人物献書 シーボルト』、吉川弘文館、1980年。
(2) (3) 山口隆男『シーボルトと日本の自然史研究』『新シーボルト研究』自然科学学会編、八咫書房、2003年。
(4) 大場薰監修『シーボルト 日本の植物』八咫書房、1995年。大場秀章『シーボルトと彼の日本植物研究』山口隆男『シーボルトと日本の自然史研究』『新シーボルト研究』自然科学学会編、八咫書房、2003年。
(5) 大場秀章監修『シーボルト 日本の植物』。
『日本植物誌』 HYDRANGEA Otaksa (アジサイ)

福岡県立図書館本

部分拡大(1)

OAG本 (色なし版)

部分拡大(2)
LILUM Speciosum (カノユリ)
おわりに
シーボルトの代表作である『NIPPON』・『日本植物誌』・『日本動物誌』は、1832～35年にそれぞれの第1分冊がでた。豪華版の色つき版と廉価版の色なし版があり、色つき版は当時のヨーロッパで広く行われていた手彩色が施され、価格も非常に高価であった。彼は決して潤沢な出版資金を持っていなかった。とくに1834～35年には資金調達を兼ねてヨーロッパの宮廷を廻り、予約募集を行っている。どれほどの資金が集まったのか、出版の総費用はどれほどだったか不明であるが、彼は図版の彩色化をそれぞれに区別している。つまり、色の違いが重要な意味をもつ植物・動物画では、一流の人々に依頼して彩色させ、日本社会を描く『NIPPON』では二流、三流の人々に頼んでいる。これは出版経費の節約を考慮してのことであろう。『NIPPON』の第8回～19回間で色ムラの目立つ「雑」な彩色図版は少なくなかった。しかし、人物の服装の色合いが少し違っていたとしても、日本社会を理解することの障害とはならなかったであろう。経費節減は、当然といえば、当然のことである。
現在でも、フルカラーの「論文」や「著書」はなかなか出ることができない。限られた資金をどの分野に集中して「いい本」を作るか、本論文でシーボルトの方針の一部を明らかにできたと思う。